

平安遷都と東北地方への進出 (642)

○桓武天皇の改革…光仁天皇の後を継ぐ

(1) 遷都…仏教政治の弊害断絶、天皇権力強化など

長岡京遷都…藤原種嗣 (造営長官) 暗殺

早良親王の祟り? (種嗣暗殺に加わった?)

平安京遷都…和氣清麻呂の献言。山背を山城と改める

寺院は東寺と西寺のみ

(2) 蝦夷征討 (東北経営)

伊治咎麻呂の乱…紀広純暗殺、多賀城焼く

征夷大將軍坂上田村麻呂、阿弭流為の軍を帰順させる

胆沢城築造、鎮守府を多賀城から移す→志波城に

(3) 徳政相論…軍事と造作をどうするか

藤原緒嗣は中止、菅野真道は継続を主張→天皇、緒嗣の意見採用

二大政策中止

称徳天皇には子がなく、死と同時に天武系の血筋が途絶えた。そこで、天智天皇の孫で62歳の光仁天皇が即位した。光仁天皇は不要な官吏を減らすなど行財政を簡素化し、公民の負担を軽くするなどの改革を行ない、政治改革の道筋をつけた。後を受けた桓武天皇が、政治改革の実を挙げようとした。その政策は、遷都、蝦夷征討、律令制の再建である。

遷都の最大の理由は、平城京は寺院などの勢力が強く、仏教勢力の政治介入を快く思わなかったことにある。それ以外に、天皇の権力を強化することや平城京が天武系の都であること、交通の便が余りよくないこと、などがある。

そして、784年に山背国長岡に遷都した。長岡京である。この地は水陸交通の要衝で、この地域に力を持つ秦氏の財力に期待したといわれる。造営は、平城京や廃止された難波京の建物を解体・移築した。造営長官に藤原種嗣が任じられたが、785年に暗殺された。これに加わったとして皇太弟の早良親王が廃され、淡路に流される途中、失意のうちに亡くなった。また、大伴氏や佐伯氏ら旧豪族も処罰された。その後、親王の怨霊*^aと思われる疫病や洪水が多発し、天皇の母も病気で倒れた。

*^a後に桓武天皇は早良親王に崇道天皇と追号した。

そこで、長岡京を捨て、794年に山背国葛野郡宇太村に遷都した。平安京である。また、この地に都が置かれることを示すため、山背国を山城国と改めた。この地への遷都は、和氣清麻呂の建議があったこと、早良親王の怨霊、10年経っても都が完成していないこと、秦氏の財力と土木技術に期待したことなどが挙げられる。そして、辛酉の革命の日を期して遷された。

平安京とは、「平安の都」を求めて名付けられたものである。大きさは東西約4.5km、南北約5.2kmである。造営は公民を雇役^{*a}として徴発し、飛驒匠^{*b}ら技術者が指導した。長岡京の殿舎を解体・移築し、新しい殿舎を造り、役所の整備がほぼ終了したのは805年だった。寺院は、朱雀大路^{*c}をはさんで東寺と西寺だけが建立された。それ以外は、平安時代後期以降のものである。

奈良時代、政府は蝦夷征討、東北経営にも力を入れた。北上川と日本海沿いを北上し、周囲を柵列で囲んだ城柵を作り、役所や倉庫を置くとともに、農民をその周りに移住させた。また、政府に帰属した蝦夷を関東以西に移住させた。しかし、780年、伊治皆麻呂が陸奥按察使^{*d}の紀広純を殺し、多賀城を焼いた。

桓武天皇は789年、紀古佐美を征東大使に任じて、蝦夷征討に向かわせたが、阿弼流為の軍に大敗した。その後も、幾度と大軍を派遣したが失敗した。そこで、797年に坂上田村麻呂を征夷大將軍^{*e}に任命し、反乱の鎮定に当たらせた。そして、阿弼流為を帰順させ、北上川中流域までを支配下に置いた。802年に胆沢城を作り、多賀城から鎮守府を移し、翌年に北の志波城に移した。811年、文室綿麻呂が北方の蝦夷を討ち、征討は終了した。

平安京の造営と蝦夷征討は、公民の疲弊を招いていた^{*f}。805年、桓武天皇は天下の徳政（善政）はどうあるべきかを貴族に議論させた。天下徳政相論である。藤原緒嗣と菅野真

*aこの時は、駿河・信濃・越前・出雲・備前・紀伊より近い地域から徴発された成年男子に食料や賃金を支給して、年30～50日間、造営に当たらせた。

*b飛驒国から里ごとに10人ずつ毎年交替で上京、朝廷の建築工事に携わった木工。

*c朱雀大路の幅は85mあった。現在の千本通りとJ R山陰本線嵯峨野線がそれに当たる。

*d地方行政官として719年に数カ国ごとに置かれ、798年に蝦夷征討のための常設の指揮官となる。

*e蝦夷平定のための臨時の最高指揮官。田村麻呂の死後にその勇名は高まり、職名は武門最高の栄誉とされた。

*fこの頃、桓武天皇は雑徭を半減するなど公民の負担軽減に努めていた。

道^{みち}*aが議論し、緒嗣は中止、真道は継続を主張していた。これを聞いた桓武天皇は、緒嗣の意見を採用し、第4次蝦夷征討を中止し、平安京の造営も中止された。

<史料>

●平安遷都（日本紀略）

丁卯、…都を遷す。詔して曰く、「云々葛野大宮^{どころ}地は、山川も麗しく、四方の国の^{ひやく}百姓の参出来ん事も便^{たより}にして云々」

十一月丁丑、詔す。「…此国山河襟帯^{きんたい}、自然に城^なを作す、斯^この形勝に因りて、新号を制す可し、宜しく山背の国を改めて山城の国と為すべし」と。又、子来之民、謳歌之輩、異口同辞、号して平安京と曰ふ。

●天下徳政相論（日本後紀）

…勅有りて、…藤原朝臣緒嗣と…菅野朝臣真道とをして、天下の徳政を相論せしむ。時に緒嗣、議して云く、「方今、天下の苦しむ所は軍事と造作となり。此の両事を^{とど}停めば百姓安んぜむ」と。真道、異議を確執して肯えて聴かず。帝、緒嗣の議を善しとし、即ち停廢に従ふ。

<コラム>

●洛

京都の別名は「洛」という。地方から京都へ行くことを「上洛」、京都に入ることを「入洛」、京都内外の名所や市民生活を描いた『洛中洛外図屏風』に使われる「洛」も京都である*。 「洛」は、中国の洛陽のことである。平安京が出来た時、中国（唐）では、西側の長安と東側の洛陽がともに隆盛だった。そこで、朱雀大路をはさんで分かれた西側の右京を長安城、東側の左京を洛陽城と読みならわした。しかし、右京は湿地帯だったため早くさびれ、左京鴨川の氾濫はあったが住みやすかった。そのため、平安京は右京を中心に栄え、洛陽の「洛」だけが残った。そして、院政期になると鴨川の東岸（現在の東山山麓）が開け、平安京の都市空間は鴨川の東西に展開するようになり、この地を「洛東」と呼ぶようになった。

●右京の荒廢（池亭記）

予（慶滋保胤）二十余年以来、東西の二京を歴く見るに、西京^{あまね}（右京）は人家漸く

*a緒嗣は光仁天皇の擁立に動いた百川の子。真道は造営事業の責任者。

*b東京に行くことを「上京」という。また、東京にある西東京市は地名としてはおかしいという。

まれまれに稀まれらにして、殆ほとほとに幽墟ゆうきよ（廢墟）に幾ちかし。人は去ること有りて來ること無く、屋いえは壞やぶること有りて造ること無し。…

律令制の再建 (643)

○律令制の再建

(1) 桓武天皇

勘解由使（令外官）－国司交代の事務引継の不正を防ぐ
健児－軍団の維持が困難になったため。郡司の子弟などを採用

(2) 嵯峨天皇

藏人頭（令外官）－菓子の変に際して。機密文書・訴訟を扱う
巨勢野足、藤原冬嗣を任命
檢非違使（令外官）－京中の治安維持、警察裁判権

菓子の変 平城上皇（平城京）、藤原式家（仲成、菓子）

v s

嵯峨天皇（平安京）、藤原北家（冬嗣）

天皇、兵を出して勝利→上皇出家、菓子自殺

(3) 法制の整備…格（律令の規定を補足・修正）と式（施行細則）

弘仁格式…嵯峨天皇が藤原冬嗣らに編纂を命じた
貞観格式、延喜格式をあわせて三代格式

令義解…養老令の官撰注釈書。清原夏野ら

令集解…養老令の私撰注釈書。惟宗直本。

桓武天皇は、左大臣を置かず貴族層を抑え、定員外の国司や郡司を廃止するなど、積極的に政治改革に取り組んだ。国司交代の際、後任者は事務引継を完了した文書（解由状）を前任者に与えたが、これを調べて国司交代の不正を防ぐ勘解由使を置いた。また、偽籍や浮浪、逃亡、疫病の流行などで、軍団の維持が困難となっていた。そこで、東北や九州を除き、軍団と兵士を廃止し、新たに郡司の子弟や有力農民を健児として、60日交替で国府の警備や国内の治安維持に当たらせた。

桓武天皇の後を継いだ平城天皇は、令で定められた官司や官人の整理・統合を行ない、財政負担の軽減に当たった。しかし、病氣^aで弟の嵯峨天皇に皇位を譲った。嵯峨天皇は、檢非違使を置いて、京都の治安維持に当たらせた。後に、弾正台、五衛府、刑部

*a病気の治療は、皇位に就いたままではできないと考えられていた。戦前も「玉体（天皇の体）に触れることは…」といわれ、昭和天皇の際もあったようである。

省、京職^{きょうしき}の職務も行ない、都の警察裁判権を司る要職となった。また、薬子^{くすこ}の変に際して、平城上皇側に機密が漏れるのを防ぐため、蔵人所^{くろうどどころ}を置き、巨勢野足^{こせののたり}と藤原冬嗣^{ふゆつぐ}を蔵人頭^{くろ}に任じた。

薬子の変は、病気で退位した平城上皇の側近藤原薬子が、上皇の復位と平城京への遷都を企て、失敗した事件^aである。その背景に、平城上皇と嵯峨天皇、藤原北家と式家の権力争いがあった。平城上皇は奈良におり、朝廷が2つあるような状況を生み出していた。「二所の朝廷」という。上皇には式家の薬子、天皇には北家の冬嗣^{なかなり}がついていた。事件は、薬子が服毒自殺を図り、兄の仲成^{なかなり}は射殺された。上皇は出家し、高岳親王^{たかおか}に代わり、大伴親王^{おおとも}^bが皇太子となった。

勘解由使、蔵人頭、檢非違使は令に規定はなく、令外官^{りょうげのかん}と呼ばれる。令外官は、職員令^{しきいん}^cの不足を補うものと特定の目的のために置かれたものがある。中納言、参議、内大臣^{ちゆうせんし}^d、鑄銭司^{おうりょうし}^e、押領使、関白、追捕使などがある。

中納言は、大納言を補佐して政務の機密に参画した。参議は、大中納言に次ぐ重職で、朝廷の政治に参与した。内大臣は、左右大臣に次ぐ重職で、太政官の政務を統轄した。鑄銭司は、皇朝十二銭の鑄造機関だが、常設ではない。押領使は、兵を率いて国内の凶徒の鎮圧に当たり、後に常設となった。関白は、天皇を補佐して政務を執り行なった。追捕使は、押領使とほぼ同じ役職である。

大宝律令や養老律令が制定されてから、社会の変化に応じて様々な法令が出された。律令の規定を補足・修正した格^{きやく}と施行細則^{しき}の式である。三世一身法は養老七年の格、墾田永年私財法は天平十五年の格などである。そこで、膨大な格や式を官庁ごとに収録し、利用者の便を図るため、弘仁格式^{こうにん}が作られた。後に貞観格式^{じょうがん}、延喜格式^{えんぎ}も作られ、あわせて三代格式^{さんだい}という。

弘仁格式は、嵯峨天皇が藤原冬嗣らに命じて作らせたものである。貞観格式は、清和天皇^{せいわ}が藤原氏宗らに命じて作らせたもので、弘仁格式以降に出されたものが掲載されている。

*a歴史に「もし」は禁句だが、平城上皇が勝利した場合、重祚して別の贈り名が送られることになる。

*b高岳親王は平城上皇の皇子、大伴親王は平城上皇・嵯峨天皇の弟で、嵯峨天皇が譲位した後に淳和天皇として即位する。

*c官司の官名・定員とその職掌に関する規定。中納言や内大臣、関白は除目^{じもく}（任命式）で補任^{ふにん}（官に任じる）された。参議や蔵人頭、檢非違使、関白は他の官職の者が天皇から兼務を命じられた。

*d中臣鎌足が死の直前に賜わったのが最初。

*e「じゅぜんし」とも読む。

る。延喜格式は、醍醐天皇が藤原時平らに命じて格、藤原忠平に命じて式を作らせた。延喜式は、前二者の式を取捨改定したもので、最も整備されている。

また、まちまちだった令の解釈を公式に統一する動きが出てきた。そこで、清原夏野らが『令義解』を作った。一方、諸家の私説が散逸することを恐れた惟宗直本が、私的に『令集解』を作った。このように、法治国家としての体裁は整えたが、新しい律令を作ろうとはしなかった。

<史料>

●健児の制（類聚三代格）

太政官符す。応に健児を差すべき事。

以前、右大臣の宣を被るに僭く、勅を奉るに、今諸国の兵士、辺要の地を除くの外は皆停廢に従へ。其れ兵庫鈴蔵及び国府等の類は、宜しく健児を差して以て守衛に充つべし、宜しく、郡司の子弟を簡び差し、番を作りて守らしむべし。

○地方と貴族社会の変化

農民の負担軽減の改革←偽籍横行、班田実施困難に

班田の励行（12年毎）、雑徭半減、公出挙の利息引き下げ→効果なし

政府の対応…政府直営田設置－公営田（大宰府）、元慶官田（畿内）

私的土地支配拡大…所司田、勅旨田、賜田→国家財政への依存低下

天皇権力の強大化、院宮王臣家の台頭

中央で様々な改革が行なわれていた頃、農民の貧富の差はさらに拡大し、負担を逃れようと偽籍が横行した。そのため、班田収授の実施も難しくなっていた。そこで、農民の負担を軽減するための改革が行なわれた。班田制の励行を掲げて、荘園が発達して困難になった6年ごとの班田を12年ごと（1期1班）に変更した。また、雑徭を60日から30日に半減し、^{くすいこ}公出挙の利息も5割から3割とした。しかし、効果はほとんどなく、班田を行なうことすら不可能な地域が増えていった。

そこで、政府は国司・郡司の租税徴収に対する不正や怠慢を取り締まるようになった。また、財源を確保するために、政府直営田を置いて、有力農民に耕作させた。823年、大宰府管内に^{くえいでん}公営田を置き、農民に食料などを支給して、良田を耕作させ、収穫物を収公し、^{がんぎょうかんでん}歳入の減少を補った。879年、畿内に元慶官田を置き、^{うけさく}請作・直営方式で収入を中央財政に充てた。後に一部を諸官司の費用にも充てた。

一方、^{しよしでん}諸官司は所司田を持ち、^{ばいとく}官人層は墾田を開発したり、買得するなど、それぞれが土地を持つようになり、国家財政への依存を低下させた。さらに、皇室の財源を確保するため、^{ちやくし}勅旨で院・宮などに勅旨田が与えられた。また、天皇の^{おんちやく}恩勅で令の規定以外に賜田が与えられた。

貴族社会は大きく変化し、天皇の権力が強大化した。それとともに^{いんぐうおうしん け}院宮王臣家が台頭した。院宮王臣家は、一定の私財を持つ皇親五世以下の王と臣下の諸家で、院・^{みやけ}宮家も含めていう。彼らは、私的に土地所有を推進し、国家財政を圧迫させていった。さらに、^{けにん}下級官人を家人（家来）化し、保護を求める地方の有力農民も勢力下に収めていった。

○弘仁・貞観文化の特徴

平安遷都から9世紀頃の文化。

漢文学の発展、密教の影響、貴族の活気あふれる文化、晩唐文化

○文学・教育

（1）儀式・儀礼の整備

（2）漢詩文…貴族の教養

勅撰…『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』

私撰…『性霊集』（空海）

文人…嵯峨天皇、空海、小野篁、菅原道真

（3）教育 大学別曹 学館院—橘嘉智子 弘文院—和気広世

勸学院—藤原冬嗣 奨学院—在原行平

空海の綜芸種智院

平安遷都から9世紀末頃の文化を、この時期の元号を取って弘仁・貞観文化という。この文化は、宮廷の繁栄を背景に、多彩な文化が花開いた。文化の特徴は、文芸を中心に国家の隆盛を目指す文章経国思想を背景に漢文学が発達したこと、密教の影響を受けたこと、貴族の活気あふれる文化、晩唐の文化の影響を受けたことである。晩唐は、唐が滅ぶ前後のことである。また、教育も整備された。

嵯峨天皇の時を中心に、儀式・儀礼の整備を国家の文化事業として重視した。平安京の殿舎、門号を唐風化し、唐風儀礼を採用する一方、文化人の国家経営に参加させた。

貴族の教養として、漢詩文が盛んに作られた。嵯峨天皇の命で小野岑守らが『凌雲集』、菅原清公らが『文華秀麗集』を、淳和天皇の命で良岑安世らが『経国集』を作った。これらは、勅撰漢詩文集と呼ばれている。空海の弟子の真税が空海の漢詩文などを集め、『性霊集』（『遍照發揮性霊集』）を編集した。この頃の漢詩文の文人は、嵯峨天皇、空海、小野篁、菅原道真らがいる。

律令制の大学では、儒教を学ぶ明経道、算術を学ぶ算道に加え、律令格式を研究する明法道、詩文や歴史を学ぶ文章道（紀伝道）も活発となった。ともに成立は奈良時代で

ある。また、有力貴族は大学別曹^{べっそう}*aを設けて、一族の子弟に勉学の便宜を図り、後に本家の大学より盛んになったが、平安末期には衰退した。学館院は橘嘉智子^{がつかん かちこ}（嵯峨天皇の皇后^{こうぶん わけのひろよ}）が、弘文院は和気広世^{かんがく}（清麻呂の子）が、勸学院は藤原冬嗣^{しょうがく}が、奨学院は在原行平^{ありわらのゆきひら}が創設した。

空海は、京都に綜芸種智院^{しゅげいしゅちいん}を設けて、庶民教育を行なった。綜芸は各種の学芸の意で、より広い立場で、儒教・仏教・道教を教えたが、空海の死後に消滅した。

*a政府が大学生^{だいがくのじょう}のために設けた直曹^{じきそう}に対する言葉。有力貴族の私的な寄宿・学問施設で、大学寮の付属機関として公認された。

○平安新仏教と修験道

- (1) 最澄の天台宗—比叡山延暦寺、台密
円仁派（延暦寺）、円珍派（園城寺）に分裂
- (2) 空海の真言宗—高野山金剛峰寺、東寺、東密
- (3) 新仏教の結果 本来…厳しい修行で国家安泰を祈る
実際…加持祈祷で現世利益を図る
- (4) 神仏習合…神仏は本来同じものとする方向へ
神社の境内に神宮寺、寺の境内に守護神
- (5) 修験道…役小角を祖。大峰山、白山などが舞台

平安京に都を遷した桓武天皇は、平安京にあった大寺院の移転を認めなかった。それは、僧侶が政治に介入して、政治や仏教を腐敗させたためである。そこで、僧侶の資格を厳しくするとともに、遷都をして仏教勢力の排除を試みたのである。また、仏教界でも革新の動きが現われた。それが、最澄の天台宗と空海の真言宗である。

天台宗を開いた最澄は、12歳で出家、14歳で僧籍に入り、19歳の時に東大寺で受戒した。しかし、世の無常と南都の仏教に不満を抱き、比叡山に隠遁し、後の延暦寺となる草堂を創建し、隋の天台大師の教理を研究した。804年、唐に渡り天台山で天台の正統を受け継ぐ資格を得、仏教経典などを多数持って、翌年帰国した。その翌年、天台宗が仏教の一宗派と認められた。しかし、比叡山に新たな戒壇を設けることに反発する南都の仏教との間で論争が起き、『顕戒論』を著わしたが、結局南都側の反対で許可されなかった。822年に亡くなり、死後7日目に戒壇勅許を受けた。

天台宗は、身分に関係なく誰もが法華経の教えにより救済されると説き、法華経の絶対平等の思想が鎌倉新仏教を生むことになった。最澄死後の翌年、延暦寺の勅額を賜わり、仏教教学の中心となり、源信や鎌倉新仏教の開祖もここで学んだ。最澄の弟子円仁と円珍が天台宗の密教化を進め、後に台密と呼ばれ、天台教団の基礎を築いた。しかし、933年に円珍派が園城寺（三井寺）に移り、円仁派の延暦寺と分かれた。以降、円珍派を寺門派、円仁派を山門派と呼ぶ。

*a現存する最古の日記『入唐求法巡礼行記』は円仁の著作である。

真言宗を開いた空海は、幼い頃から伝説も多い^{*a}。15歳で上京、18歳で大学に入学したが、大安寺の僧勤操の虚空蔵求聞持法^{*b}に魅せられて僧になった。その後、出家して修行を積み、31歳の時に東大寺で受戒して正規の僧となった。

受戒した年に唐に渡り^{*c}、長安で青龍寺の恵果和尚^{*d}から真言宗を学び、書法も学んで20年の留学予定を3年足らずで終えて帰国した。帰国後は筑前に住み、嵯峨天皇の頃に帰京、819年に高野山金剛峰寺を創建して、密教の発展に尽くした。823年に京の教王護国寺（東寺）を下賜され、日本の密教が開花することになった。

真言宗は、大日如来、金剛頂経を中心に加持祈祷^{*e}で現世利益が得られるとともに、密教（秘密の呪法）で即身成仏^{*f}が可能であると説いている。真言宗の密教を東密（真言宗の密教、東寺の密教）という。空海の著作には、儒教、仏教、道教の優劣を論じた『三教指帰』などがある。

最澄と空海は、同じ年に唐に入った。帰国後も、新仏教の展開という点で書簡や經典の往復を通じて友好を深めたが、根本的な違いから、その関係は長く続かなかった。空海が最澄に書き送った『風信帖』は有名である。

両宗派の本来は、山中で厳しい修行を積んで国家安泰を祈ることである。しかし、実際は加持祈祷で現世利益を図る仏教として皇室や貴族の間でもてはやされた。その結果、密教が流行し、祈祷儀式にも影響を与えることになった。奈良時代の仏教は、国家の保護を受けて国家安泰を祈る鎮護国家的なもので、理論的・学問的側面を持っていた。一方、平安新仏教は、貴族の現世利益的なもので、密教的傾向の強い祈祷などの実践面が重視され

*a 「弘法さん」「お大師さん」と親しまれる空海の人気は絶大で、全国に弘法大師創建、中興とされる寺があり、また「弘法井」「弘法清水」「弘法機」など数多くの伝説がある。親切にしてくれた人には、杖で地面をたたいて清水を湧かしたり、尽きることのない布を与えたが、意地悪な人には芋や梨などを食べられない石にかえてしまったという。

*b 虚空蔵菩薩を念じて修行を続け、記憶力の増進をはかる修法

*c 空海を乗せた船は出発翌日に暴風雨に遭い、南方の地に流された。田舎の役人は遣唐使のことなど知らないため、上陸は出来たが移動は出来なかった。そこで、同乗していた越前太守に頼まれて、空海が役人に文章を書いて見せたところ、役人は字の素晴らしさと文章に感嘆し、一行が長安に行くことを許したという。

*d 「和尚」は「わじょう」とも読む。

*e 加持は、祈祷で病気を治したり、不思議な現象を目の当たりにすることと思われているが、本来の目的は即身成仏である。

*f 行者が本尊の前に座り、真言を唱え、印契を結び、心を一点に集中させて、本尊を觀想し、両者が一体化して解け合い、行者は肉体を持ったまま、現世で悟りを得て仏になること。

た。

国家が管理していた仏教は、次第に民間に広がり、古くからあった神々と融合する動きが現われた。神仏習合^{しんぶつじゅうごう}である。例えば、神社の境内に神宮寺^aを建てたり、寺の境内に守護神を鎮守として祀^bったり、神前で読経^{どきょう}するなどである。

また、山中での修行を重んじる新仏教の風は、古くからの山岳信仰と結びつき、修験道^{しゅげんどう}の源流となった。修験道は、役小角^{えんのおづの}を祖とする仏教の一派で、密教、神道、陰陽道などの影響を受けた呪術的山岳信仰である。大和の大峰山^{おおみね}、加賀・飛騨の白山、紀伊の熊野山、出羽の羽黒山^{はぐろ}などが中心的な舞台となった。

*a伊勢神宮にも神宮寺があった。今のJ R・近鉄伊勢市駅がその跡である。それ以外に、鹿島神宮（常陸）、気比神宮（越前）などがある。

*b三重県の多度大社が例

○密教美術

(1) 建築…室生寺

(2) 彫刻…一木造、翻波式

密教彫刻…神護寺薬師如来像、室生寺金堂釈迦如来像など
神像彫刻…薬師寺僧形八幡神像など

(3) 絵画 神護寺と教王護国寺の両界曼荼羅、不動明王像

(4) 書道 三筆（嵯峨天皇、空海、橘逸勢）

新仏教の成立は、芸術にも大きな影響を与えた。これまで、寺院の伽藍（寺院の建築物の称）は同一平面上（平地）にあった。しかし、この頃には、山中に建てられることが多くなり、地形に応じて自由に配置された。「女人高野」で知られる室生寺が有名である。

彫刻は、一本の木で作られる一木造^{いちぼくづくり}が主流で、衣紋（衣服）は力強い翻波式^{ほんばしき}で彫られた。密教の影響を受けた彫刻には、神護寺薬師如来像、室生寺金堂釈迦如来像や弥勒堂釈迦如来像、観心寺如意輪観音像などがある。また、神仏習合が反映して作られた神像彫刻には、薬師寺僧形八幡神像などがある。

絵画でも、密教世界を具体的に説明した曼荼羅（曼陀羅）が描かれた。この言葉は、サンسكريット語（梵語）のmandala（nとdの下に・がつく）に由来し、悟りの境地に達するという意味がある。神護寺と教王護国寺の両界曼荼羅が知られる。両界曼荼羅は、金剛界と胎蔵界を描いたものである。前者は、仏が煩惱を破ることが金剛のように強いことを、大日如来を中心に諸尊をめぐらして示したものである。後者は、胎児が母体の中で成長していくように、人間が悟りに進んでいく姿を、諸仏を配して示したものである。

また、不動明王像も描かれ、園城寺、高野山明王院などに残る。前者を黄不動、後者を赤不動という。また、平安末期に描かれて青蓮院に残る不動明王を青不動という。この頃の絵師に百済河成がいる。

*a頭部と胴体が一本の木で造られているもの。肉が厚いため深く彫れるという特徴がある。
対語は寄木造^{よせぎづくり}。

*b木像彫刻の衣のしわを表現した方法。角味の大波と丸味の小波と交互に繰り返す波の翻るように表現したもの。

書の世界では、唐風の力強い書体がもてはやされた。当時第一の能書家（文字を上手に書く人）に、嵯峨天皇、空海^a、橘逸勢^bがあり、三筆^cと呼ばれた。平安時代初期は、奈良時代から続く中国の所を尊重し、それを習うことを重視した。しかし、この頃から、日本独自の書風が加わる傾向が見られ始めた。

空海の「風信帖」は、最澄に宛てた書簡3通を巻物にしたもので、それぞれに書風の違いが見られる。空海は、楷書、行書、草書、隸書、篆書の五書体の他に、飛白体も書くことが出来た。嵯峨天皇が書いたといわれる「光定戒牒」^eは、最澄の弟子光定が、延暦寺で大乗菩薩戒を受けた時に下賜されたものである。大小の楷書、行書、草書を自由に使い、歐陽詢と空海の書風の影響が見られる。

橘逸勢が書いたという確証のあるものはない。「伊都内親王願文」^dが彼のものと伝えられるが、江戸時代に藤木敦直という書家が、嵯峨天皇や空海のものでもない優れたものと鑑定し、現在に伝えられる。これは、伊都内親王が母の遺言で山科寺（興福寺の旧称）へ寄進したもので、縦長の右上がりの文字を大小混ぜ合わせて、自由奔放な行書で書かれ、用筆もところどころにゆらした揺れが見られる。

*a唐に留学中、皇帝の命で王羲之の書跡を修補したが、口と両手、両足に筆を取って、五か所同時に五種の筆法で書き上げたので五筆和尚の名を得たという。「弘法筆を選ばず」と「能書筆を選ばず」という諺の意味は「字の上手な人は筆の善し悪しを選ばない」である。しかし、空海は『性霊集』で良質の筆の必要性和書体別の筆の選択について述べている。少なくとも、あらゆる書体を自由自在に書き、特別に優れていたことから生まれたと考えられる。

*b818年、嵯峨天皇が大内裏の東面の三門、空海が南面の三門、橘逸勢が北面の三門の額を書いた。また、大内裏の中心部にある朝堂院の正門にある応天門には、空海が書いた「応天門」の額がかかっていたという。

*c戒牒は、僧が授戒した証明に授けられる公文書

藤原氏の台頭 (648)

藤原冬嗣…嵯峨天皇の信任篤い、皇室と姻戚関係

藤原良房…承和の変、応天門の変→橘、紀、伴氏の没落。摂政就任 (清和天皇の時)

藤原基経…関白就任 (光孝天皇の時)。阿衡の紛議→関白の政治的地位の確立

藤原時平…宇多天皇の親政 (寛平の治) →菅原道真の登用

醍醐天皇の親政 (延喜の治) →道真、大宰府へ左遷 (昌泰の変)

藤原実頼…安和の変→源高明らを左遷。藤原北家の地位が不動に。摂関がほぼ常置。
その地位に忠平の子孫が就く。

藤原北家は、薬子の変で式家との対立を終わらせた。藤原冬嗣は、嵯峨天皇の厚い信任を得て蔵人頭となり、皇室と姻戚関係を結び、力を伸ばし始めた。

冬嗣の子良房は、842年に承和の変を起し、伴健岑^{*a}を隠岐、橘逸勢を伊豆^{*b}に流した。これは、健岑、逸勢らが皇太子恒貞親王を擁立しようと計画し、阿保親王 (在原業平の父) の密告で失敗した事件である。また、皇室に大きな影響力を持っていた嵯峨上皇^{*c}が亡くなって数日後に起こったことから、良房の陰謀という考え方も出来る。事件後、恒貞親王は廃され、良房の妹の子を皇太子^{*d}とした。

良房は、857年に太政大臣、翌年に清和天皇を即位させ、天皇の外祖父として臣下として初の摂政^{せつしょう}となった。摂政は、天皇の政務を代行する役職で、天皇が幼少時に置かれた

*a元は大伴姓。大伴親王 (淳和天皇) と名が一致するため、伴姓を名乗った。

*b804年に唐に渡り、帰国後に従五位下に叙され、840年に但馬権守となる。承和の変で伊豆に流される途中、遠江で病死したという。娘が後を追い、父が亡くなると亡骸を葬り、塚の前に庵を作って冥福を祈り続けた。許しが出ると亡骸を掘り起こし、背負って都に戻ったという。逸勢の書とされる大内裏北面の額には怨霊が住むといわれ、恐れた人々は逸勢に位を追贈し、鎮魂しようとしたという。

*c死ぬ直前、弔いに国の費用を使ってはならないと言い残し、棺は山の不毛の地に穴を掘って埋められたといわれる。

*d道康親王、後の文徳天皇

*a。866年、大納言伴善男が左大臣源信の失脚を狙って、応天門に放火した。応天門の変^{＊b}である。信の無罪は良房が証明し、犯人が善男の息子中庸とされたため、善男が伊豆、共犯者の紀豊城が阿波、紀夏井が土佐に流された。承和の変と応天門の変で、橘、伴、紀氏は没落した。良房は866年、正式に摂政となった。

良房の後を継いだのが、養子の基経である。基経は、884年に光孝天皇が即位すると関白の実を受け、887年に宇多天皇が即位すると、正式に関白となった。関白は、天皇の後見を務める役職で、成人した天皇に置かれるが、律令の規定にない令外官である。

基経は関白の詔が出ると、慣例に従って辞退した。その後に出された詔勅にあった「阿衡」という言葉をめぐり、政務を放棄した^{＊c}。阿衡の紛議（阿衡事件）である。結局、天皇が詔勅の非を認め、詔勅を起草した橘広相を処分した。これは、藤原氏と外戚関係のない宇多天皇を牽制をするために起こしたといわれ、関白の政治的地位が確立することになった。

基経の死後、宇多天皇は摂政・関白を置かず、菅原道真を登用して藤原氏を抑え、親政を行なった。寛平の治である。菅原氏は奈良時代以来の学者の家で、道真も文章博士になっていた。899年に右大臣となるが、学者としては異例の出世だった。これをねたんだ左大臣の藤原時平らは901年、道真が醍醐天皇を廃して、女婿^{＊d}の齊世親王を立てようとしていると上奏して、大宰権帥に左遷した。昌泰の変である。

969年、源高明が女婿の為平親王を擁立しようとしていると、源満仲が密告した^{＊e}。安和の変である。高明は失脚して九州に流された。この結果、摂政・関白のいずれかが常に置かれ、基経の子孫が就くことになった。

<史料>

●摂政のはじめ（日本三代実録）

（清和天皇貞観八年八月）十九日辛卯、太政大臣（藤原良房）に勅して天下の政^{まつりごと}を撰

*a現在の『皇室典範』には、天皇が幼少の場合や病気で公務が執れなくなった時、国会の承認を受けて置くことが出来ると規定されている。最近では、戦前の『皇室典範』の場合だが、大正天皇の病氣療養のため、裕仁親王（後の昭和天皇）が摂政に就いたことがある。

*bこの事件は「伴大納言絵巻」に詳しい。

*c「阿衡」は位だけで、職掌は伴わないから、一切の政治を行なう必要はないという意見に従ったもの。

*d「むすめむこ」とも読む。

*e高明と満仲は同姓だが、高明は醍醐天皇の子、満仲は清和天皇の曾孫に当たる。

こう
行せしむ。

● 関白のはじめ（日本三代実録）

…太政大臣藤原朝臣、…今日より官庁に坐して就きて万政を領行ひ、入りては朕が躬を輔け、出でては百官を総ぶべし。奏すべきの事、下すべきの事、必ず先づ諮り稟けよ。朕将に垂拱（一切を任せるの意）して成を仰がんとす…

<コラム>

● 菅原道真の左遷とその後

時の左大臣藤原時平は、菅原道真の才能をねたみ、罪に陥れてやろうと策略し、「道真は国家の政治を私物化している」と醍醐天皇に何度も讒言（事実を偽って悪くいうこと）した。そして、901年1月に道真を大宰権帥に左遷、筑紫国に流罪とすることとした。長年住み慣れた自宅の庭に植えられた梅が咲いているのを見て、「東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」*aと詠み、旅立った。その梅は菅原邸から大宰府の庭まで飛んで行って根付いたという「大宰府の飛梅」の伝説がある。

道真は、左遷されて2年後に亡くなった。時平は道真の怨霊におびえながら病死し、醍醐天皇の皇太子も急死した。930年、内裏の清涼殿に落雷し、大納言藤原清貫が即死、ショックで寝込んだ醍醐天皇も3ヶ月後に亡くなった。怨霊を恐れた人々は、北野神社（現在の北野天満宮）を造営して道真を祀った。雨乞いの関係で、民衆が信じていた雷神の信仰と落雷騒ぎが道真の霊と結びつき、道真を火雷神と恐れるようになった*^b。

*a 文章の句は『大鏡』より。第5句は、『拾遺和歌集』では「花を忘るな」となっている。

なお、口語訳は次の通り。「（春になって）東の風が吹いたなら、（その風に乗せて、遠く大宰府まで）香りをよこしてくれよ、（遠い京の私の家の庭の）梅の花。（おまえの）主人がいないからといって、春を忘れるな」

*b 唯一、道真の所領だった桑原には落ちなかったという。そこから、落雷や嫌なことを避けていう時のまじない「くわばら、くわばら」ができたといわれる。天神を学問・芸道の神として、寺子屋などに祀るようになったのは江戸時代になってからである。

延喜・天曆の治（649）

延喜の治…醍醐天皇の親政。延喜の荘園整理令、最後の班田（902）
三善清行の意見封事十二か条
『日本三代実録』、『古今和歌集』、『延喜格式』の完成
天曆の治…村上天皇の親政。『後撰和歌集』撰集、乾元大宝の鑄造

藤原北家が他氏排斥を行っていた10世紀前半、醍醐天皇と村上天皇が、摂政・関白を置かず、自ら政務を行なった。この時代を延喜・天曆の治と呼ぶが、両天皇の間に即位した朱雀天皇の時には、藤原忠平が摂政・関白を務めていた。

醍醐天皇は、昌泰の変で菅原道真を左遷した後、自ら政務を行なった。延喜の治である。902年、最初の荘園整理令となる延喜の荘園整理令を出した。これは、勅旨田^{*}の廃止、院宮王臣家が山川藪沢を占有して荘園を新設することを禁止したものである。この結果、初期荘園は衰退したが、正式に認可を受けて国司の統治を妨げない荘園は認めたので不徹底だった。また、賃租農民の確保と班田制の維持を難しくし、902年を最後に班田は行なわれなくなった。

914年、三善清行[＊]が政治の現状を分析して12か条の対策をまとめた。意見封事十二箇条である。内容[＊]は、中央・地方政治の改革、経費節減である。意見封事とは、律令官人が天皇の命で封を閉じて提出した政治上の意見書で、最初に天皇が見た後に公卿が議論し、採用するものは理由を記して、再び天皇の元に届けられた。

また、901年に最後の六国史となる『日本三代実録』、905年に最初の勅撰和歌集となる『古今和歌集』が作られた。そして、最後の格式となる『延喜格』『延喜式』が907年、927年に完成した。

*a天皇の命令で皇室領として開墾・耕作された田地

*b文人官僚として菅原道真の後輩に当たる。官吏登用試験で一度不合格となったが、この時の試験官が道真だった。以後、事あるごとに対立したが、道真が左遷された後、出世を遂げた。

*c神人・僧の統制強化、ぜいたくの禁止、大帳登録数に見合う口分田の班給、大学学生の食料財源の設定、五節の舞姫の減員、判事の増員、季禄支給の平等化、下級官人・百姓による国司告訴の却下、課役免除者の定員設定、名目的な検非違使の補任の停止、諸国の悪僧・舎人の乱暴停止、播磨国魚住泊の修復の12箇条。

朱雀天皇の後を受けて即位した村上天皇も、自ら政務を行なった。天暦の治である。951年に『後撰和歌集』が作られ、958年に最後の皇朝十二銭となる乾元大宝が鑄造された。

延喜・天暦の治は、後世から理想の時代とされた。しかし、政治の実質的な再建は容易でないことをさらけ出した。都や地方の治安も乱れ、律令に基づく政治も行なわれなくなった。

<史料>

●延喜の荘園整理令（類聚三代格）

まさ かいでんなら しょういんしよぐう ひやくせい しゃたく かん ち
応に勅旨開田並びに諸院諸宮（皇族）及び五位以上、百姓の田地舍宅を買い取り閑地
こうでん せんせい ちやうじ
荒田を占請するを停止すべき事

…宜しく当代以後、勅旨開田は皆悉く停止して民をして負作（割りあてて耕作する）せしめ、其の寺社・百姓の田地は、各公驗（土地の所有権を証明する文書）に任せて本主に還し与ふべし。…但し、元来相伝して庄家と為し、券契（荘園設置の認可文書）分明にして国務に妨げなきは、此の限りに在らず。

摂関政治の誕生 (650)

摂政・関白（氏長者を兼ねる）を出す家＝摂関家
摂関の地位をめぐる争う…兼通・兼家兄弟、道長・伊周の伯父と甥

安和の変以降、摂政か関白が常に置かれ、太政官の上に立って政治を行っていた。摂関政治である。そして、摂政・関白を出す家を摂関家といい、摂政・関白となった者が、氏長者うじのちやうじやを兼ねた。氏長者は、藤原氏の頂点に立つ者で、氏寺うじでらの興福寺、大学別曹の勸学院の管理や一族の官位推挙に当たった。しかし、この地位をめぐる争い、一族間で争いが繰り広げられた。特に、兼通かねみち・兼家兄弟かねいえ、道長みちなが・伊周これちかの伯父と甥の争いは有名である。伊周が罪を得て左遷されると、道長が左大臣となり、争いは終わった。

970年に藤原実頼さねよりが亡くなり、伊尹これただが関白となった。2年後に伊尹が亡くなると兼通が関白となった。いつも、弟の兼家の位が上だったので、兼通は妹の安子あんしに「摂政・関白は兄弟の順に選ぶように」と書かれた手紙をえんゆう円融天皇に見せ、天皇も母（安子）の言いつけで兼通を関白に任命した。974年に娘の皇子こうしをよりただ円融天皇の皇后とし、頼忠よりただを相談相手とし、兼家を無視した。

兼通の病気が重くなり、外で兼家ぎっしやの牛車の音がしたので、仲違いなかつがをしていても見舞いに来てくれたと喜び、弟に関白を譲ろうと考えたが、牛車は通り過ぎて御所に向かった。兼通は重態の床を飛び起きて参内し、最後の除目（官吏任命式）を行ない、頼忠を関白、兼家を右近衛大將うこのえのだいしやう（従三位）から治部卿じぶのきやう（正四位下）とし、それから1ヶ月も経たないうちにこの世を去った。

円融天皇は984年、花山天皇かざんに位を譲った。関白の頼忠は、兼家を右大臣に推し、懐仁やすひと親王を皇太子とし、兼家は次期天皇の外祖父の地位を手に入れた。花山天皇が熱愛する女性が亡くなって出家の意志を持つと、一夜のうちに譲位させて、懐仁親王を即位させた。一条天皇いちじやうである。そして、兼家が摂政となり、居貞親王いやすだを皇太子として、天皇、皇太子を外孫として、この後の摂関の地位を兼家の子孫で独占する基礎を築いた。

995年4月に関白の道隆が糖尿病で、後を継いだ道兼も宣旨せんじを受けた8日後、流行して

*a実頼の甥、実頼の弟師輔の子、兼通・兼家の兄。「これまさ」とも読む。

*b実頼の子、兼通・兼家の従兄もろすけ

*c冷泉天皇の子れいぜい

*d兼家の娘詮子せんしの子

*e兼家の娘超子ちやうしの子、後の三条天皇さんじやう、天皇より年長の皇太子は初めて

いた赤斑瘡（はしか）で亡くなった（七日関白）。道兼の後継者は、伊周と道長^{*a}の2人となった。結局、一条天皇は母の詮子の推薦で道長を後継に選び、道長は内覧^{ないらん}となった。翌年、伊周は花山法皇が自分が通う女性の所に通い始めたと誤解し、弟の隆家と相談して、隆家は夜帰宅途中の法皇を馬上から射て、袖を居通した。さらに、詮子を呪って病を重くしたと噂が立ち、伊周を大宰権帥^{いずもごんのかみ}、隆家を出雲権守に左遷し、道長は左大臣となった。

999年、道長は娘の彰子^{しょうし}を一条天皇の女御とし、翌年に中宮^{ちゆうぐう}の定子を無理に皇后と呼ばせ、彰子の中宮にあげた^{*b}。また、娘が生んだ親王を即位させる執念は物凄く、三条天皇^{*c}を在位5年で讓位に追い込み、後一条天皇を即位させ、自ら摂政となった。

*a伊周は道隆の子、道長は道隆の弟。伊周の妹は一条天皇の中宮定子、道長の姉は一条天皇の母詮子。『大鏡』には、道長と伊周の弓を射る競争が記されている。道長は「この道長の家から、天皇・妃がおたちになるならば、この矢当たれ」と言って放ったところ、的の真ん中に当たったが、伊周はこれに気後れして手が震え、矢は見当違いの方角に行ってしまった。この話は弓の名手であり実行力のある豪胆な道長像を伝えてくれている。

*b中宮は皇后の別名。

*c血族結婚の結果、眼病を患っていた。目が悪く、時々見えなくなるくらいだったという。

摂関政治の全盛（651）

摂関政治の全盛…道長、頼通の時

当時の貴族社会

結婚後…母方の縁が非常に重い

摂関家…天皇の最も身近な外戚、天皇の権威を利用、官吏任免権の掌握

政治の運営…天皇が太政官を通じて、中央・地方の役人を指揮

命令・伝達は太政官符や宣旨で伝達

後に先例・儀礼を重んじるようになる＝年中行事の発達

政治運営の形式化

摂関政治の全盛は、11世紀前半の道長、頼通父子の頃である。道長は、4人の娘を皇后、皇太子妃として入内させ、30年間にわたって朝廷で大きな権力を振るった。後一条、後朱雀、後冷泉の3天皇は道長の外孫で、頼通がこの3天皇を約50年にわたり摂政・関白を務めた。道長は御堂（法成寺のこと）関白といわれるが、関白には就いていない。頼通は、宇治（宇治平等院のこと）関白といわれる。

『小右記』^aには、道長の栄華を批判的に伝えている。「此世をば、我世とぞ思ふ、望月の、かけたることも、無しと思へば」と詠んだ道長も、晩年は病氣^bで苦しんだ。そこで、法成寺を建立して仏にすがったという。この寺の金堂に阿弥陀仏を9体安置したと『栄華物語』^cには記されているが、1058年に全焼した。

当時の貴族社会では、結婚後^aは妻方の両親と同居するか、新居を構えた。また、母方の縁が非常に重く、夫は妻の父の庇護を受け、子どもは母方の手で養育された。邸宅などの財産は娘に譲られることが多かった。そこで、天皇を後見する資格として、天皇の外戚（母方の親戚）であることが重視されたのである。

そして、最も身近な外戚である摂政・関白は、天皇の権威を利用して、役人の任免にも深く関わるようになった。そのため、中下級の貴族が摂関家に従属し、上流貴族の権勢を強大なものとなった。さらに、昇進の順序や限度は、家柄や外戚でほぼ決まった。その中

*a藤原実資の日記。『小野宮右大臣日記』を略したもの。

*b糖尿病、背中の腫れ物、下痢、糖尿病からくる眼病（人が近づいても分からないほど）、胸痛（大声をあげて苦しむほど）など

*cこの頃の結婚は招婿婚が普通である。

で、中級官人などは、律令体制下で経済的に有利とされた国司になることを求め、私領の獲得に努めた。

政治は、天皇が太政官を通じて、中央・地方の役人を指揮し、全国を統一的に支配していた。主政務は太政官で公卿の会議で審議されたが、重要政務は内裏このえの近衛の陣で開かれる会議（陣定）で、公卿各自の意見が求められた。そして、決定事項は天皇（または摂政）が決裁し、太政官符だじょうかんぷや宣旨で命令が伝達された。

しかし、次第に先例や儀礼を重んじる形式的なものとなり、宮廷では年中行事ねんじゅうぎょうじが発達した。そのため、政治の運営は形式化し、積極的な施策はほとんど見られなくなり、地方支配は国司に委ねて、国政に励む責任感に欠けていた。

年中行事は、季節に従って特定の日に行なうことが慣習となった行事で、公家、武家、民間それぞれにあり*^a、現在にも受け継がれているものもある。稲作儀礼も年中行事だが、暦が伝わり、中央での権力が安定すると、次第に宮廷での年中行事が整えられた。

宮廷の年中行事は、嵯峨天皇の時に整備された。嵯峨天皇は、『内裏式』『内裏儀式』を制定して、これまでの宮中行事を正式なものとして整備するとともに、新たな行事を制定した。そして、宇多天皇は、文化が国風化していることを背景に、行事の日本化が考えられ、日本の民間で行なわれていた行事が取り入れられた。

神事では、1月の四方拝しほうはい、4月の賀茂祭かもまつり、6月と12月の晦日の大祓みそか おおほらえ、11月の新嘗祭にいなめさいなどがある。四方拝は、年の初めに天地四方を拝して年災を祓い豊作を祈る儀式である。賀茂の祭りは、京都の賀茂神社の例祭で、現在は毎年5月15日に行なわれ、葵あおいの葉を装飾用あおいまつりに使うことから葵祭ともいう。大祓は、罪や汚れをはらう儀式である。新嘗祭は、稲の収穫を祈り、神に感謝し、来るべき年の豊穰ほうじょうを祈願する儀式である。

仏事では、2月の彼岸会ひがんえ、4月の灌仏会かんぶつえなどがある。彼岸会は、悲願の7日間に行なう仏教の法会で、日本独特の行事である。灌仏会は、4月8日に釈迦の降誕こうたんを祝して行なう法会である。政務では、1月の叙位・除目じょいなどがある。叙位は五位以上の位階を授ける儀式、除目は諸臣任官の儀式である。

遊興では7月の七夕たなばたが、武芸では5月の競馬くらべうま、7月の相撲すまい、それ以外に1月の七草粥ななくさ、6月の祇園祭ぎおんまつりなどがある。競馬は、2頭の馬を直線コースの馬場で走らせて勝負を争ったものである。相撲は、天皇が宮中で相撲を観覧する行事である。七草粥（七種粥）は、正月15日に粟・稗あわ・黍ひえ・胡麻きび・小豆などを入れて炊いた粥を食べるもので、小豆粥のことである。

*^a武家は室町時代初期、民間は江戸時代にほぼ固められた。

<史料>

●藤原道長の栄華（小右記、寛仁2年10月16日条）

…今日女御藤原威子^{いし}を以て、皇后に立つるの日なり。…太閤^{たいこう}（道長）、下官を招き呼びて云く、「和歌を読まんと欲す。必ず和すべし^{でえり}」者。答へて云く、「何ぞ^{いづくん}し奉らざらんや」。又云く、「誇りたる歌になむ有る。但し宿構^{しゅつこう}（前から作っていたもの）に非ず」者。「此世をば、我世とぞ思ふ望月の かけたることも無しと思へば」。余申して云く、「御歌優美なり、酬答^{しゅうとう}（かえしの歌をよむ）^{すべ}に方無し。満座ただ此の歌を誦すべし…」と。

●道長の栄華（栄花物語）

この御悩^{たまひ}（道長の病気）は、寛仁三年三月十七日より悩ませ給て、同廿一日に出家せさせ給へれば、日長におぼさるるままに、さるべき僧達・殿ばらなどゝ御物語せさせ給て、御心地こよなくおはします。今はただ「いつしかこの東に御堂建てて、ささしう住むわざせん。…かくて世を背かせ給へれども、御急ぎは「浦吹く風」にや、御心地今は例ざまになり果てさせ給ぬれば、御堂の事おぼし急がせ給。摂政殿国国までさるべき^{おおやけごと} 公事をばさるものにて、先づこの御堂の事を先に仕ふまつるべき^{つか} 仰言給ひ、…日々に多くの人々参りまかで立ち込む。

国際情勢の変化 (652)

遣唐使の停止 (894) …菅原道真の建議

唐の衰退、航海の危険、唐や新羅商人の来航が理由

日宋関係…唐滅亡 (907) →五代十国→宋の統一 (960)

国交は開かず、宋の商人の来航、巡礼目的で渡る僧も

中国東北部…渤海の滅亡 (926) →遼 (契丹、916)

朝鮮半島…新羅の滅亡 (936) →高麗 (918) の半島統一 (935)

※遼、高麗とも国交を開かず

894年、菅原道真の建議により、遣唐使が停止された。廃止の理由は、安史の乱以降の唐の衰退や航海の危険^a、唐や新羅の商人が博多に来航しており、わざわざ莫大な費用を使って、危険を冒してまで公的な交渉を続ける必要はないと考えていた。さらに、宇多天皇が信任している道真を手放したくなかったことや律令体制の崩壊が平安貴族の国際意識に変化をもたらし、財政的にも派遣を難しくしていたことも挙げられる。

その唐は907年に滅亡し、唐を中心とした東アジア文化圏は崩壊した。その後、五代十国を経て、960年に宋が大陸を統一した。宋とは国交を開かなかったが、宋の商人が博多に来航し、日本は工芸品や薬品を輸入し、金や水銀を輸出した。日本人の海外渡航は禁止されたが、僧の渡航は許されなかった。奄然、寂照、成尋らが入宋した。

また、中国東北部では渤海が926年に遼 (契丹) に、朝鮮半島では新羅^bが925年に高麗に滅ぼされた。ともに国交は開かれなかったが、高麗からは書籍や薬品などが日本に輸入され、11世紀後半には貿易が活発になった。

<史料>

●遣唐使の廃止 (菅家文章)

諸公卿をして遣唐使の進止 (派遣するか、やめるか) を議定せしめんことを請ふの状

右、臣某、謹んで在唐僧中瓘、去年三月商客王訥等に附して到す所の録記を案ずる

*a東シナ海を横断していたこと、新羅の海賊の動きが活発になっていたことである。

*b9世紀になると、新羅商人の活動が顕著となり、814年以降取り締まりの対象となった。高価な舶来品を日本にもたらした。

に、大唐の凋弊（ちょうへい衰え）、之を載せること具（つぶさ）なり。…臣等伏して旧記を検するに、度々の使等、或は海を渡りて、命（めい）に堪ざる者有り。或は賊に遭いて遂に身を亡ぼす者有り。唯、未だ唐に至りては、難阻飢寒（なんそきかん困難な行路・飢えや寒さ）之悲有りしことを見ず。…